Mixed juice　～カラフルな恋の物語～

。+蝶。+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｉｘｅｄ　ｊｕｉｃｅ　～カラフルな恋の物語～

【Ｎコード】
Ｎ８３４４Ｙ

【作者名】
。＋蝶。＋

【あらすじ】
俺は、彼女に初めてあった。
いや――初めてじゃない。前に何度もあっている。
バカ騒ぎしてしょっちゅう笑われた、小学校の時と全然違う彼女の姿。
いろんな恋は不思議に絡み合う。
ミックスジュースの甘い香りに連れられて・・・。

※更新が少し間が開きやすいかもしれません。
それでも見てくださる方、最後までどうかお付き合い願います☆

登場人物

（登場人物）

渕上　佑大　　フチガミ　ユウタ　（２０歳）
紅岬大学経済学部の２年生。
スポーツ万能成績優秀顔もまぁまぁ。　（篤郎とハウスシェアしている。）
万葉と５年ぶりに会う。

吉福　万葉　　ヨシフク　カズハ　（１９歳）
紅岬大学音楽学部の１年。
音楽が大好きで、ピアノを専攻。（友里恵と大河と香帆莉と都竹とハウスシェアをしている）
祐大とは、５年ぶりに会う。

街矢　大河　　マチヤ　タイガ　（１９歳）
紅岬大学建築学部。の１年。
万葉とは、高校が一緒で仲がいい。　（上同）
ずっと万葉が好きな事を隠していた。

嶺崎　香帆莉　ミネサキ　カホリ　（２０歳）
帆月女子大学法学部の２年。
佑大と同じ高校で高校に入ったときから佑大が好きだった。（上同）
大河の従弟（いとこ）。

鈴宮　拓磨　　スズミヤ　タクマ　（２０歳）

雪原短期大学音楽学部の２年。
万葉の幼馴染で、同じく音楽が得意。
バイオリンを専攻している、万葉の憧れの存在。

朽網　友里恵　クタミ　ユリエ　（１９歳）
紅岬大学音楽学部の１年。
万葉と仲良しの幼馴染。歌が得意で声楽を専攻している。（上同）

篤郎が好き。

有村　玲衣　アリムラ　レイ　（１９歳）
帆月女子大学語学部の１年。ハーフで英語がしゃべれる。
万葉とは小学校が同じだった。
峰岬とはたまに廊下ですれ違うくらい。　（爽太と家が隣）

都竹　爽太　ツヅキ　ソウタ　（２０歳）
雪原短期大学建築学部の２年。
鈴宮とは、大親友で玲衣とは幼馴染。　（玲衣と家が隣）
語学が得意で、多国語（米、仏、中、韓などなど）が話せる。
（上同）

松本　篤郎　マツモト　アツロウ　（２０歳）
紅岬大学経済学部の２年。
祐大の親友。友里恵と仲がいい。　（佑大とハウスシェアしている）

梶原　聖　カジワラ　ヒジリ　（１９歳）
雪原短期大学経済学部の１年。
美亜の双子の兄。
玲衣の彼氏で都竹とはとても仲がいい。（上同）

梶原　美亜　　カジワラ　ミア　　（１９歳）
雪原短期大学インテリア学部の１年。
聖の双子の妹。
都竹とは結構仲がいい、玲衣とはよく廊下でおしゃべりするところを
生徒が目撃する。絶世の美女。　　（上同）

登場人物（後書き）

少しずつ増えていくと思います（汗）
読んでくれるとありがたいです☆
感想&コメントお願いします（笑）

Ｍｉｘｅｄ１　～再開～（前書き）

お話スタートです☆

第三者視点

Ｍｉｘｅｄ１　～再開～

４月。
爽やかな風とふんわりとした桜が皆を迎える。
今日は紅岬大学の入学式。

有名な音楽、学問、スポーツ、すべてをかねそろえた
大学、『紅岬大学』は皆のあこがれである。

主人公、渕上佑大（ふちがみ　ゆうた）は学問の部門で
この大学に去年の４月、入学した。

「なぁなぁ、佑大。今年の入学生代表の挨拶は美人さんだってさ！」

これは、佑大の親友。松本篤郎（まつもとあつろう）である。

「それがどうしたってんだよ。どうせお前は自分の後輩が来るからうれしいだけだろーが。」

「あっバレた？」

「バレバレだよバーロ。」

楽しい会話を終え、佑大は生徒代表の言葉をするため、松本とともに
体育館に入っていった。

「おい！佑大、俺後輩見っけぇ～～☆」

「あれっ？あいつ・・・。」

「そうだぜ、朽網友里恵（くたみ ゆりえ）。可愛い小学校の時の後輩だよ～♪」

「ってことは、俺の知り合いの幼馴染だな。」

「へぇ・・・？誰だよそれ、女？」

「だまれ、はじまるぜ。」

入学式の始まり、学長や教授紹介などが終り、祐大の生徒代表の言葉も終わった。

そして、

「入学生、代表の言葉。代表者は前へ。」

コンッ・・コンッ

「万葉（かずは）・・・？」

桜が綺麗に道をほんのり桃色に染め、
明るい太陽はふんわり、それを照らしている。

Ｍｉｘｅｄ１　～再開～（後書き）

どうだったでしょうか？
感想等よろしくおねがいします☆

Ｍｉｘｅｄ２　万葉と友里恵

「今日は、天候も快晴。すがすがしい入学式となりました。
私は、この大学で友人とともに学問に励みすばらしい大学生活になることと思います。
自分の良いところや悪いところ。良いところは伸ばし、悪いところは良いところになるよう
頑張って伸ばしてゆくつもりです。
それをこの学校でできることを感謝します。
平成☆年４月１２日。代表、吉福万葉。」

パチパチッ

拍手が万葉に舞い落ちる。

入学式終了後、帰宅途中。――

昔、万葉と仲がよいときは福岡の実家でよく遊んだりした。
まあ、万葉とは同じマンション、号室は佑大の上が万葉だった。

まぁ実際、朽網友里恵と万葉を『幼馴染』と呼ぶなら、
佑大とその兄、リョウヤも万葉の『幼馴染』だ。

「それでさぁ～、玲衣もそういってたんだよ～（笑）」

「うっそ～（笑）でもそれありえるわ～。」

「アハッだよねぇ（笑）」

あれは、うわさをすればと言う感じに、朽網と万葉だ。

その後ろには・・・

「よっ♪友里恵ちゃん久し振りぃ☆5年ぶりだねぇ！」

「あっ松本先輩！お久し振りです☆」

「あっ、松本篤郎先輩ですよね！友里恵から聞いてますよ～？」

「ちょっと万葉ぅ！言わないでよ～はずいから！」

「アハハッキミたちほんっと仲いいねぇ☆」

「「はいっ！！」」

アハハッ

普通に笑えている。

篤郎はのんきでいいものだ。

俺には到底かなわない。

吉福万葉。小学生だった頃、初めて年下に恋をした、その相手。

結局、その恋はかなわなかった。
俺が告白できないまま、大丈夫だろうと甘い気持ちで中学に入学してしまったからだ。

次の年、万葉は中学には入学してこなかった。

後で後輩に聞いたところ、彼女は6年のとき、塾に入り成績が上がり他の有名な私立校に
入学したのことだ。しかもそれを聞いた相手は、万葉の仲の良かった友人。
『有村玲衣(ありむれい)』だった。

それでも、俺は万葉のことが気になって仕方がなかった。
だから、彼女のろくに作らず交際した女性は自然消滅で消えていった。

「おっ！佑大。そこにいたか！」

間が悪いものだ。

こんなにあっさり、好きな女にばれてしまうなんて――――。

Ｍｉｘｅｄ２　万葉と友里恵（後書き）

次回まで投稿しちゃいそうな勢いです・・・（笑）

最後まで、お付き合いしてくれたらありがたいです☆

Ｍｉｘｅｄ３　再開、そして知らない男（前書き）

大河登場です☆

Ｍｉｘｅｄ３　再開、そして知らない男

「篤郎、さっきからうるせーんだよ。
頭の中にガンガン響くわバーカ。」

「ひでーな。いいじゃねーか、そういや万葉ちゃん。佑大の幼馴染なんだって？」

言われてしまった。
一番言われたくなかった。

『いいえ？ただ単に家が同じマンションだっただけですけど・・・？』と
いわれるのが怖いから。

万葉はなんというのだろう。
『もちろん！昔は仲良かったですよぉ☆』とでもいってくれるだろうか。

「そうですよ☆よくマンションの下でマンションの他の号室の子も交えて
遊びました（笑）まだ、小学生だってですから。幼かったですよ（笑）」

まじか・・・。
泣けるぜ、万葉。

ありがとう。願いを叶えてくれて。

「そっかー。友里恵ちゃんは一緒に遊ばなかったの？」

「たまに遊びましたね（笑）ほとんど佑君が万葉に追いかけられてましたけど・・・（笑）」

「へっ？佑君？」

朽網友里恵消えてなくなっちまえーーーー！！

なんでいうんだよ！万葉がこれから俺を苗字で呼ぶかもしれないのに・・・。

恐怖が余計深まるじゃねーか！

「あぁ！昔は母さんが俺の事を佑ちゃんって言ってたから、万葉に佑ちゃんって言えって

なって佑ちゃんって言い始めて、その後、佑君になり佑になった。」

「『大』が全部ねーな。」

「まあな。」

ゆってしまった・・・・。

篤郎に昔他のやつに『佑』といわれ母親には『ちゃん付け』で呼ばれていたことを（涙）

万葉が口を開いた。

「そうだったねぇ☆そうだ！これから遊びに行かない？暇だし・・

・。」

「いいね！万葉ナイス！」

「俺も賛成！！」

「わかったよ！いきゃーいいんだろ？いきゃー！！」

とまぁこんな感じでこの後、いっぱい遊び俺たち男子は万葉と朽網を送る事になった。

Ｍｉｘｅｄ４　俺の知らない男、彼女の親友（前書き）

新キャラ作りました！
詳しくは登場人物を見てください！

Ｍｉｘｅｄ４　俺の知らない男、彼女の親友

「じゃああたしたちの家ここだから♪」

そこは、とてつもなくでかい洋館。

「お前らこんなとこにほんとに住んでんの・・？」

「そうだよ☆佑君と篤郎先輩もあがっていきますか？」

「い・・いいの？」

「「はい☆」」

洋館の中――

「どうぞ～、少し散らかってますけど・・・。」

「「どこが散らかってるんだ！？」」

これまた、綺麗に整理されたリビング。

散らかってるところなどひとつもない。

「そんなに驚いてどうしたんですか？わたしたち、いっつもこんな感じですよ？」

そんなとき、奥から誰かが歩いてきた。

「お帰り、『万葉』『友里恵』。結構遅かったな。」

誰だろう。　知らない男だ。

「ただいま、大河。香帆莉さんたちはもう寝ちゃったの？」

「いや、聖は起きてるけど・・・香帆莉(かほりねえ)姉はわかんねー。
美亜はおもいっきし寝てるぜ。」

誰なんだ。こいつ。

「そうなんだぁ、まあいっか。あっそうだ、友里恵。ごめんけど
あたし今度のオーケストラ演奏会
の練習があるからごめんけどあとよろしくね。」

「わかった。がんばってね？演目は？」

「ショパンとドビュッシーの選曲集よ。」

「いいねｗｗ頑張って！」

「うん！」

そして万葉は部屋に入っていった。

そのあと、とりあえず大河に自己紹介をして、自宅に戻った。

Ｍｉｘｅｄ５　大学での災難　（前編）

「であるかあら～～となる。そしてこれは～～」

あぁめんどい。

とことんめんどい。

大体レポートを一日に２つも出すバカな教授いるか？

ほんっとめんどい。

しかも、今日は午後までである。昨日みたいに簡単じゃない。

それに・・・

（どうしたんですか？渕上先輩。）

そう、街矢大河。

こいつは建築学部の癖に経済学までとっていやがる・・・。

「それでは解散！レポートは２５日までに提出だ！」

うへぇ・・・。

２５日までに絶対終わんねーー。

とりあえず飯くって落ち着いてしたほうがいいな。

とりあえずカフェテリアに・・・

「先輩、カフェテリア行くんですか？」

「そうだけど？」

「じゃあ一緒に行きましょう！」

「いいよ☆レポートしないといけないし」

「そうですね！」

「おっ！万葉、友里恵今から昼？」

「そうだよ。一緒行く？」

「いいねえ☆渕上先輩も一緒でいい？」

「「もっちろん！」」

というわけで・・・。

俺はこいつらに振り回され一緒に学食を食べるためカフェテリアに行く事になった。

Ｍｉｘｅｄ７　大学での災難　（中編）

「え・・・。留学するのか？」

「そうよ。大河、友里恵と一緒にいくの。」

俺は絶句した。

そう、万葉は俺が卒業する来年にフランスの音楽学校に留学する。

でも、なんでだろう。わざわざどうして来年なんだ？

別に卒業してからでもいいのに・・・。

でも、少しうれしかった。

俺は、将来作家になる夢を持っている。

経済学に入ったのは知識を入れておくため。

そして俺も、来年フランスの専門学校に留学する予定だ。

「そうなんだ。じつは俺も来年フランスに留学するんだぜ。」

「ほんと！？」

嘘だ。

驚いた振りしても無駄だ。

俺は知ってる。嘘をつくとき万葉はいつも手をいじっている。

「あぁ。何処の学校？」

「パリよ。佑は？」

「俺もパリだ。朽網も行くって事はなんか目標があんのか？」

「ま・あ・ね・☆まぁうまくいったら教えてあげる（笑）」

あぁ。

なんていい事があったんだ。

でも、そう長くは続かなかった。

大河が俺たちの目の前で万葉に告白したからだ。

・・・

「俺さ、前から言おうと思ってたんだけど、お前が好きだ！
万葉。」

万葉は固まってしまった。

「か、万葉？大丈夫か？」

万葉は口を開いた。

「何でこんなところでするの・・・。
大河、もう少し話がわかる人だと思ってたのに・・・（涙）」

ポロッ

万葉は涙を流しながら走っていった。

そしてたまたま俺と万葉が同じサークル『読書愛好会』の活動にもこなかった。

＋＋次の日＋＋＋＋＋＋＋＋

「佑、おはよう。昨日はごめんね？」

大学に向かう途中万葉が後ろから歩いてきた。

朽網は一緒じゃない、多分1人で行きたいと頼んだんだろう。

「あぁ、もう大丈夫なのか？」

「うん。ありがとう、心配してくれて・・・。」

やっぱり、小学生の時とはちがうな。

静かになってる、でもそこが新しい万葉の特徴なんだろう。

「一緒に行くか？」

「うん！それと・・・」

「どうした？」

「あのね・・・これからは一緒に行って欲しいの。」

「い、いきなりどうした？」

どうしたんだ。

さすがに変わったとはいえ、おかしい。

「中学、じつはわざわざ違うところに行ったの。それで・・・。」

「それで？」

「それで・・・。じつは、嫌われるんじゃないかと思って。」

「なんで？俺がお前を嫌うんだ？」

俺が万葉を傷つけるようなことをしてはいないし、
万葉にきもいとかそういうことは言ったことはない。

お互い仲が良かったから、『バカじゃないの』とか『アホ』とか
お互いがいうことしか言わなかった。

「え・・・？だって手紙、佑からでしょ？」

「俺が手紙？」

「だって佑が中学に入ったとき、手紙くれたじゃない。」

俺が手紙？

だって、中学ではすでにお互い携帯を持っていてメルアド交換も
していたから
手紙にするはずがない。

でも、俺じゃなかったら？

大体検討はついた。

「それ、リョウヤかもしんねー。」

リョウヤの企み、そして思い

「え・・。リョウヤ君？」

まだリョウヤの呼び方変わってないんだ。

まぁ俺もだけどな。

リョウヤは、俺の兄貴。

長身でそれこそモテる。（俺もモテるらしいが彼女をまともに作ったことがないからわかんねー）

まぁ顔は俺とリョウヤ、二人とも親譲りだかんな。

周りの反応では母さんはそこそこの美人。

そして父さんもそこそこの美男。

まぁいってみれば美面ぞろいの家族ってことか。

「そうだ。だって俺は中1の時すでに携帯持ってたからお互いメールじゃん？」

「そうね～？」

「だけど、そんときリョウヤは何にも理由がなかったから持ってなかった。」

「えっ？」

「俺は塾とサッカーで忙しかったけど、リョウヤは塾だけだったから。」

「そういうこと・・・じゃぁ。」

「信用していいの？」

「あったりめーだろ。バーカ。」

リョウヤがいる

私は普通に佑たちと４人一緒の授業が終わって（たまたまかぶったの）
お昼を食べるためにカフェテリアに向かう途中、見つけてしまった。

「リョウ、ヤ、くん、？」

「おっ！万葉じゃん。」

「リョウヤ？なんでここいんだよ。」

「母校だからな。べつ自由だろ、それは。」

「そうだけどよ。」

なんでココにいるの？

だっていま、就職したんなら会社かどこかにいるでしょ？

お昼休みでも、さすがにスーツだろうし・・・なんで私服なんだろう。

リョウヤサイド＋＋＋＋

「リョウ、ヤ、くん、？」

「おっ！万葉じゃん。」

「リョウヤ？なんでここいんだよ。」

「母校だからな。べつ自由だろ、それは。」

「そうだけどよ。」

おっかしーな。

なんで佑大と万葉が一緒にいんだ？

朽網が兄貴のアキラから万葉と一緒だって聞いたけどよぉ？

元に戻って万葉サイド・・・

（佑、なんでリョウヤ君がいるの？）

（わかんねーよ、俺も知らなかったし俺事態が篤郎とルームシェアだから。）

（そっか・・・でもなんで？）

（お前に会いに来たんじゃねーか？手紙の事もあるし・・・そろそろ告るとか？）

（ちょっと！でも、そうじゃないと来ない、よね？）

「なにこそこそ話してんだ？」

「「な、なんでもない（よ）？」」

危なかった。

でも、佑の言う事が本当だとしたら・・・

佑、危ないんじゃないかな？

佑の予言は大当たり、リョウヤの告白

「ねぇ、佑大。ちょっと万葉借りてくね☆」

「っちょおい！」

「リョウヤ君ちょっ・・・」

さらわれてしまった。

「俺、予言者として食ってけるかも・・・」

「なにいってんの！さっさと万葉たち追いなさいよ！」

「で、でも・・・・」

ガシッ

俺は朽網に腕をつかまれ少し遠くに連れてこられた。

（あんた、万葉のこと好きなんでしょ？）

（なっ！／／／）

（バレバレだよ。あたしと万葉、それに佑君。いつから一緒だと思ってんの！？）

（そうだな・・・。いってみる！）

ダッ

俺は走っていった。

屋上―

「むりやりつれてきてごめん。」

「う、ううん。」

「あのさ、俺お前がすきなんだよ。」

「・・・」

「それでさ、お前はどう

バンッ「リョウヤ！ふざけんじゃねーぞ！」

「ゆ、う」

「なんで来るんだよ。お前にはかんけーねーだろ。」

「あるんだよ！」

「ほ～？それで何が関係あるんだ？」

「とりあえず、お前の企みはお前をこの大学で見たとき
二人ともわかってたんだよ！」

「なーんだ。あっそ、なら強行突破だな。」

ガシッ

うそだろ！？

リョウヤは万葉を抱き寄せ屋上から飛んだ。

バラバラバラッ

へっヘリがなんで！？

「じゃぁな。あと、これからほかの女と結婚するなら、
Ｇｌｏｂａｌ（グローバル）　ｃｏｎｓｕｌｔａｎｔ（コンサルタント）　ＨＵＣＨＩＧＡＭＩ（ふちがみ）．
をどうぞ～☆」

万葉が連れ去られてしまった。

そのあと、友里恵が調べてみたところ、

Ｇｌｏｂａｌ（グローバル）　ｃｏｎｓｕｌｔａｎｔ（コンサルタント）　ＨＵＣＨＩＧＡＭＩ（ふちがみ）は

リョウヤが社長を務めるホテルや、病院などを経営する大手企業

だった。

連れ去られた万葉（かのじょ）

「じゃぁ強行突破だな。」

「キャッ！」

う・・そ・・・。

私は寝てしまった。というより、眠らされてしまったといったほうが妥当かもしれない。

しばらくして・・・

「ん・・・こ、こどこ？」

静かだけど、ものすごく大きい。

ホテルのスイートルームか、どこか大きい家の一室だろう。

「あ、起きた？」

「リョ、リョウヤ君。」

「ここ、俺ん家のゲストルームなんだ。」

「リョウヤ君、なんでこんな大きい家に？」

「俺が会社経営してるかんな。」

「そ、そうなん、だ。」

会社経営、か。

すごいな。

「それでさ、さっきの返事くれない？」

「そ、そんな・・・急には無理よ・・・。」

「そっか。じゃぁしょうがねーな。しばらく待つよ。答えが出るまで。」

私はこのとき、リョウヤ君にどうしようもなく迷惑をかけていて情けない気がしてならなかった。

友里恵の考えそして、万葉の居場所

「どうしよ・・・万葉。」

「探すしかねーけど、それでも手がかりが・・・」

「会社も駄目だしな・・・どうしようもねーぜ？」

連れ去られてしまった万葉。

後に残されたのは、佑、友里恵、篤郎だった。

「私的には、リョウヤ君の家に行ったと思うんだけど・・・
あれっ？ちょっとまって」

友里恵が考え始めた。

しばらく沈黙が時間を支配する。

すると突然、

「わかったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「な、なんだよ。」

「さっき、ヘリが来てたでしょ？しかも、それで会社に行ってな

いとしたら
私、何処かわかるわ！」
「じゃぁ行こうぜ！」

この意見を飲み、皆は万葉を探しに走っていった。

ココだった。

「ココってさ～・・・」

「そ、大学の裏にある豪邸。
前々から誰が住んでるのか気になってたの。」

ピンポーン

鳴らしてみた。

『はい？』

「あの、友達がそちらに伺ってないかと」

『ご友人のお名前は？』

「吉福万葉です。」

『そうでしたかぁ。どうぞ。』

なんと玄関が開いた。

「朽網、すげー。」

「そりゃどうも☆」

「すっげー」

家の中に入っていった。

「万葉さま、お客様がいらっしゃってますが・・・」

『お客？わかりました。通して大丈夫です。』

ガチャッ

ドアを開けて入ったその先には、

「万葉！」

「万葉！なんでまたピアノなんか・・・」

「そうだぜ？万葉ちゃん。」

万葉がピアノを弾きながらのんびりしていたところだった。

助けていただきました☆

「万葉ぁ～。これってさ～ってオメーラなんでいるんだよ！？」

「リョウヤ。もう、お前の好きにはさせねーぞ。万葉は俺らに返してもらうかんな！」

そのとたん、友里恵がリョウヤのお腹に蹴りをいれ（友里恵は意外と合気道の県大会チャンピオンだったりする）

その瞬間、佑大が万葉を抱きかかえ篤郎は佑大を抑えようとしている男を蹴りでなぎ倒し、

友里恵、篤郎、佑大、万葉は無事、リョウヤの家を脱出した。

「ゆ、佑。」

「なんだよ」

「そ、そろそろ下ろして？」

「わかったけどよー、走れよ？」

「う、うん」

万葉は一緒に走った。

しかし、なぜか友里恵と万葉は少なからず自慢できるほどに足が

速い。

友里恵は昔、陸上系クラブに入っていた。しかし、万葉は昔から運動が苦手だ。

ただし、水泳は出来るのだが・・・

「万葉なんでそんなにはえーんだ？」

「知らないわよ！これでも、必死に走ってんだからね！」

「ワリーワリー。」

まぁ、そのまま友里恵と万葉の家に４人でむかっていった。

「おかえり☆あらどうしたの？えらくぜーぜーいってるじゃない。」

「それはどうでもいいでしょ！」

「はいはい・・・。あら、渕上君・・・。」

「み、嶺崎？」

このとき、友里恵と篤郎は嵐が来そうな予感がした。

久し振りの再開？

「ひ、久し振り。渕上君」

「おう」

そのとき・・・・

「あ、友里恵、万葉。お帰り」

「た、ただいま。大河。」

助かったといわんばかりに友里恵は話に答えた。

「ゆ、佑。ハーハー、これから、ど、するの？」

まだ万葉は息が切れている。

「そうだな・・・帰る途中に、とかねーといいんだけど・・・」

「じゃぁココにいれば？泊まってきなよ。」

「あー、で「やったね！俺泊まってく！」

佑は、篤郎に少しは我慢しろよといわんばかりに篤郎を睨みつけた。

そのとき・・・

ピラリーン　ピラピラ　ピーラー（着メロ）

「あっ・・・万葉、あたし今日は友達の家にいくわね」

「は、はい・・？」

ガチャン

香帆莉はいってしまった。

「佑、もしかして知り合いなの？」

「高校が一緒だった。」

「万葉ちゃん、佑大は嶺崎に告られたことがあるんだよ・・・。」

嶺崎の過去

「あのね・・・。渕上君、その・・・、付き合ってくれない？」

一瞬の沈黙があたりを支配する。

「ごめん。俺、好きなやついるんだ。」

学校の放課後。雑木林のある校舎の裏。

「そっか・・・ごめんねっ」

タタタタタタタタッ

彼女は走っていった。

嶺崎　香帆莉。

そこそこの美人。

自由端麗。いわゆる、『大和撫子』

「私は、あなたのどこを好きになったんだろうね・・・・。」

香帆莉は、家の自分の部屋で泣き崩れていた。

香帆莉が彼を好きになったのは・・・

『彼』と『キミ』を重ねていたからかもしれない。

嶺崎の過去　？

彼、鈴宮拓磨（すずみや たくま）は私の初恋であり、
初失恋の相手。

中学の入学式、私は一瞬にして目を奪われた。
長身のとっても気さくそうな彼。

一目で恋に落ちた。

でも、壁があった。

「鈴宮く「拓磨ぁ！」

「なんだよ。大声出すんじゃねーぞ。」

「ごめんごめん（汗）そういえば佑は～？」

「知るか、んなもん！」

「えぇ～！教えてよぅ！」

「やーだ！」「教えて！」

吉福万葉（よしふく かずは）。

彼同様、気さくで明るく皆にすぐ溶け込んでいた1つ年下の彼女。
私は勝てなかった。

小学生の時から物静かで友達を作るのが苦手な私は中々彼に話しかけられなかった。

だから、明るくて気さくな彼と彼女がうらやましかったのかもしれない。

二人は幼馴染だ。それにその頃『両思い』という噂もあった。

そして私は自分で勝手に失恋した。

いまだかつて一度もなかった初恋と初失恋を、私は悲しい思いにとらわれながら

その物語(おもい)に終止符を打ったのだ。

嶺崎の過去　？（後書き）

過去編パート？ですね☆

あとひとつぐらいで過去編は終りかな？（きいてどうすんじゃい！

感想等お待ちしてます☆

嶺崎の過去　？

「今日は桜が綺麗・・・。」

今日は高校の入学式。

そしてまた私は恋をした。

渕上佑大（ふちがみ ゆうと）に・・・。

彼はどちらかというと身長は普通くらい。

お兄さんがいてとっても似てる。かっこいい。

席が目の前にある。

でも、いけない。

でも、これは駄目。言わなければ。

「あの・・・。通してもらってもいいですか？」

「あっ？あぁおう！」

「ありがとうございます。」

彼と私の出会い。

私と彼は席が隣だったに過ぎない。

でも、いつから好きになったのかな？

ひょっとしたらもっと前かも知れない。

学校に行く途中？校舎に入って？

わからない。でも、

『運命の赤い糸』で結ばれているのかなって考えてしまった。

大学のレポート

「それはこうでしょ。」

「もーわかんねー。」

ココはお昼のカフェテリア。

なのにすいてる。まぁ今日は皆中で食べてるからね。

多分、教授たちに居残りを頼んで欲しくて（そろそろ皆し始める頃なんだと思う。）

中で食べてるんだろうけど。

しかも、私たちがしてるのは各授業のレポート。

私は好きな科目のだからすぐに終わりそうなんだけど・・・

大河と佑はもう、やばい・・・

文系で文章を書くのを得意としている私はずっと付きっ切りで教えなきゃいけない。

「おわったぁ〜〜！！」

「遅いんだけど？佑。」

「いいじゃん。これで遊べる。」

「俺あと少しなんだけどここが・・・」

「はいはい・・・何処ですか？」

もう、疲れた。

助けてよ！友里恵。

でも、友里恵は数学関係の勉強で精一杯みたい。

わたしってなんでこんなこと引き受けちゃうわけ？

帆月女子大学（前書き）

香帆莉が友達の家に泊まった次の日です。

帆月女子大学

「ふぁ～～～ん。眠いなぁ・・・。」

私は有村玲衣！

前話までに登場した万葉の友達だよ！

スッ――――――――。

私の横を誰かが通っていった。

ここは、1年生フロアだから年上がいるわけがないのに、

顔が広い私でも・・・あの子誰だろう？

お昼、カフェテリア。

「ねぇねぇ、清乃。今日――――」

そのとき、見ちゃった。

「ね、ねえ！清乃。あの人誰だかわかる？」

「あぁ、あの人は2年の嶺崎香帆莉先輩だよ。」

「へぇ・・・。」

なんだか、いっつも悲しそうな目をしてる。

どうかしたのかな？

このとき、この先何が起こるかなんて誰もわかんなかったし、予測も

出来なかったと思うな。

ありえない

「そうそう、だからこれはこうで、これはこう！よしっ！できた。」

「ほぇ～。ありがとうっ佑。」

「いえいえ（笑）」

ここは、帆月女大と紅岬大の中間地点にある、カフェ。
結構人気だから帆月の生徒も紅岬の生徒もよく来ているなじみのカフェだ。

「かっ万葉ちゃん・・・それに渕上君も・・・。」

「香帆莉さん。こんにちわ☆」

今日は大学が休みの日。
えらい人はこういう日でも大学に行くの。私はいつもなら友里恵と宿題済ませてるとこなんだけど、　今日は佑に誘われて初めて二人でカフェにお出かけしたんだ。

ターンターン　タンタンティティタティ　タタタターンティタタターン

「ごめんなさい。もしもしっ？」

「あっ香帆莉！？あんたのお母さんが！」

「えっ！？今すぐ帰るわ。うん。じゃあ。」　ピッ

ガシッ

香帆莉が電話をきったとたん。
香帆莉は佑の手をつかんで走っていった。

「ふぇっ！？ちょっ嶺崎！？」

「あっ佑！」

佑が連れ去られた。

私の中には絶望が心をみたし、
気が付いたときには涙が出ていた。

ありえない（後書き）

次で、香帆莉が佑を連れて行った理由がわかるかな？
その次かも・・・わかりませんが見てってやってください（汗）

お母さんのために

タタタタッ　　カサッ

「おい！嶺崎ってば！」

タタタッタ・・・　　カサッ

「どうしたんだよ。いきなり連れ出して・・・」

「お願い、いまだけ。話をあわせて・・・。」

俺はさっき、万葉と勉強(デートといいたい)をしていたとき、
嶺崎が携帯で何かあったらしいことを聞いて俺だけ引っ張られてココにいたる。

『２０５ゴウシツ　嶺崎(ミネサキ)　美苗(ミナエ)　様』

ガラッ

嶺崎が病室のドアを開けた。

「お母さん・・・。」

そこには嶺崎が少し老いたような風に見える女性。
そして嶺崎の『母親』だ。

「香帆莉・・・。ごめんね・・？最近具合悪くて。」

「ううん。そうだ！お母さん。この人が私の婚約者(フィアンセ)だよ。」

「あら・・・。」

婚約者(フィアンセ)・・・

まさか・・・、嶺崎の両親はあと少し・・・。

「娘を、お願いしますね・・・。」

カサッ

ピーッ　ピーッ　ピーッ

「お母さん・・・お母さん・・・・！」

嶺崎は何度も『母親』の名前を呼んだ。
だけど、もう『嶺崎　美苗』は帰ってこなかった。

「あぁぁぁぁぁぁ！！おかあさーーーん！！いやぁぁぁぁぁ！」

嶺崎の頬には、『雨（涙の雫）』がつたっていた・・・。

お母さんのために（後書き）

これでわかっていただけたのかしら・・・

自信がありません（汗）

わかった方は感想お願いします。

リクエストもお待ちしてます☆

万葉が思ったこと

「はぁ～・・・」

私はいま、一人でさびしくレモンティーを飲んでいる。

なぜかって？

佑が香帆莉さんに連れて行かれたから、どうする事も出来ずそのまま

カフェに残っているの。

「万葉？」

「爽ちゃん。」

この人は私の憧れの存在であり、友達の玲衣の幼馴染。

玲衣ちゃんと遊んでいる時はいつも一緒だった。

「どうしたの？ってかそれ、渕上のじゃん。」

「そうなの。佑・・・。」

「渕上、なんかあったのか？」

問われたおかげで爽ちゃんにすべてを打ち明けてしまった。
でも、そのほうがいいと思った。
だってそのほうが何か佑に戻ってきてもらう方法が見つかるかもしれないじゃない。

「そっか・・・渕上、どうしたんかな」

「わかんない・・・。」

「じゃあ・・・って・・・。」

そのとき来たのは

「爽太、ここで何してんの？」

「も、もしかして玲衣？」

「そうだけど・・・あんた誰？」

「万葉だよ！吉・福・万・葉・！」

「あぁ！久し振りだね♪でもなんで二人が？」

「たまたまだよ。渕上がさぁ・・・」

「渕上先輩どうかしたの？」

「香帆莉さんにつれてかれちゃったの・・・。」

「か、香帆莉さんが！？」

「そう・・・。」

しばらくの沈黙が続いた。

しかし、それは彼女のおかげで破られた。

「私、いい考えがあるよ。」

作戦1！

コソコソコソコソッ・・・

「ねっ？いい考えでしょ？」

「いいと思う。でも、万葉は」

「わかってるって、そう思ったからあんたにしか言わないんじゃない！バカ。」

「うっせー！」

ただいま、私は考えを聞かせてもらってません・・・。

なんか私が聞いてたら絶対失敗するんだってさ・・・。

なんかひどい・・・（怒）

「ってことで万葉。いまからうちらが頼むことをしてね？」

「う、うん？」

「よしっ！じゃあとりあえず万葉、渕上先輩のバックもっていったん帰んな。」

「へっ？・・・わ、わかった。」

結局、私は考えを聞かずじまい・・・。

作戦は実行に勝手に移されてしまったの。

作戦1！の続き・・・（汗）

バタン

「ただいまぁ～。」

「あっ！万葉☆おかえりなさい。今日は早いですね♪」

あ、みんなは一回聖との会話んとこで聞いたと思うけどこの子が聖の双子の妹の美亜（みあ）。

なぜか敬語でしか話さないの。しかも双子の兄の聖にまで。

でも、それが美亜には合ってると思う。

ただ、名前は慣れた人だと呼び捨てになってくれるんだけど・・・。

「今日は大学じゃないからね。」

「へぇ・・・私は友達とショッピングに♪楽しかったです☆
これ、買ったんですけど・・・どうですかね？」

美亜が見せたのはすっごく可愛いキャラメル色の短めのコート。
下のほうで黒のリボンの飾りがついてて女子だったら絶対可愛い！
っていってる感じ。

美亜はモデル並みにセンスがいいからかわいいの仕入れてきたなぁって思う（笑）

「可愛いっ！」

「明日、小学校の同窓会があるんです。だからお気に入りのクリーム色のワンピ着ていったら合うかなっと思って」

「いいと思うよ。それで行きなよ！絶対似合う。」

カチャッ

私が紅茶を美亜に渡す。

「ありがとうございます☆万葉はいつなんですか？同窓会。」

「あぁ・・・そういえばいつだっけ、同窓会。」

考えてみれば最近いろんなことあって忘れてた・・・

そういえば『出席』ってしてたっけ。

手帳を見る。

「あ、あさってじゃん。」

「ほんとですか！？じゃあなに着ていくんですか？」

「そーだな・・・美亜そんときはちょっとお手伝いお願い。今日はもう

作り始めないと晩御飯、やばいね。あたし当番だから。」

「はい！今日、なんですか？」

「シチューだよ☆」

「やった！大好きです♪」

こんな会話しながら夜は更けていった。

同窓会

「万葉・・・。」

「佑、よかった。帰ってきたんだ。心配したんだよ？大学も来ないし・・・。」

今日は小学校の同窓会。

今日はたまたま万葉と佑のそれぞれのクラスが同窓会だった。会場が同じ場所だったこともあり、万葉は忘れていたため少し驚いた。

「ごめん、万葉。」

「ううん。会えたから／／／」

照れる万葉。

昔なら見れなかった照れが今となっては同じ顔で見れる。

佑は顔がうれしさであふれた。

「ふっちー？こっちこいよ！」

「？あぁ、わりー。今行く！じゃあ帰り一緒いいか？」

「うん。じゃあ帰りね。」

「あのさぁ。万葉ちゃんってさっき男の子と話してたじゃん。」

元クラスメートの三目（みつめ）　亜理紗（ありさ）が聞く。

「う、うん。それがどうしたの？」

万葉は小学生のころは男勝りと言わんばかりに明るかった。
それこそ男子とも仲がいい人が多かったためそこまでおかしくないのだが・・・

「だってさ、この歳であんなに仲がいい男子がいるって彼氏以外ないじゃん！
　あたしだって彼氏いないのに・・・・まさかすきなの！？」

万葉はむせてしまった。

亜理紗は美人で有名。小学生のころから読モの経験もあり、
今もモデルとして大活躍中だ。

それに万葉はまだ、お互いの気持ちを確かめ合っていない。

「・・・／／／」

「図星ぃぃぃ！」

またほかの子が叫んだ。

松林（まつばやし）　早矢（さや）だ。

「さ、早矢ちゃん。びっくりするじゃん。」

「ごめんごめん（笑）それで、誰なん？」

「そ、それは・・・」

あ、早矢ちゃんが言っているのは昔の私の真似。
お父さんが大阪出身でなんでか私も大阪弁が入ってたからそのせい。

「もう、早矢ちゃん！？」

「ごめんってば。で、誰？」

「む、昔早矢ちゃんに言った人。」

「う、うそぉぉぉ！渕上くん？」

「／／／」

「え、えっらーーーい！すごいじゃん。」

「まさか。。。両思い！？」

「えぇぇぇぇぇ！」

こんな感じで恋バナがずーーーーーっと続いたのであった。

同窓会の帰り

どこでも二次会はあるものだ。

万葉はちょうど数日前、２０歳になった。
だからお酒を飲むことはできる。しかし少し苦手なのだ。

佑も『俺も二次会あるぜ？場所一緒だし。終わったらまってろよ？急いでくるからよ。』
ということで今は二次会が終わり店を出たところ。

「お、来たか。急ごうぜ！終電過ぎちまうしよ。」
「うん。」

ちょうど店の前に佑は待っていた。

「じゃーね☆万葉ちゃん♪」
「ばいばーい！んじゃメールするねぇ☆万葉、忘れないでよ！あさっての
合コンのヘルプ！」

「ば、ばいばーい！でも、合コンはちょっと（汗）」

そう言っている間に二人は行ってしまった。

「ンじゃ帰るか？」
「うん」

二人歩く。
しかし、何かがおかしい。
なぜか万葉がゆっくりなのだ。

「万葉、どうし・・・

バタンッ

「おい！万葉！おい！」

万葉は倒れた。
佑はなんとなく予想していた。
万葉は酒が苦手だ。
それで倒れたのであろう。

「んしょっと。」

佑は、万葉をおぶり、
ホテルに連れて行った。

そう、時刻はもう１２：００を回っていた。
終電はもう、過ぎてしまったのだった。

ホテルでの目覚め

「んんっ・・・ココ・・・」

「あ、おきたか。はよ、万葉」

万葉が目覚めた。

万葉はまだ少し眠いのか目をこすっている。

「ココどこ？」「ホテルだよ。お前が倒れて携帯みたらもう終電すぎてんだから。」

「うそっ！？」「ほんと。」

万葉は半ベソ状態だ。

「あれ、でもなんにも・・・」「俺がそんなことするように見えるか。オラ」

「ゴメンゴメンッ」

周りを見た。どう見てもホテルならスイートルームにしか見えない。

「ねぇ。まさかココ。スイート？」「ちげーよバカ、ココはＶＩＰルームだぜ。」

び、ＶＩＰルーム・・！？

「び、ＶＩＰルームって。」「俺のホテルだからな。」

俺のホテル、それが意味する言葉は、

「あんたってまさか社長かなんか？」

「あったりー。」

「す、すごいな。渕上家の息子はみんな経営業してるの・・・。」

「んーと。俺はまぁまぁの成績。だけどリョウヤんとこは少し赤字気味なんだ。」

「ってことは弟の方が経営上手ってこと？」

「かもな、」

こんな会話をして、まもなく今日は休みだと知った万葉はいったん家に帰り
着替えた後、佑とともにショッピングに向かいおしゃれすぎるほどに似合う服が
多く、選ぶのが大変だったらしい。（↑大学友人の証言。見かけたらしい）

友里恵

いまはちょうど講義の真っ最中。

「ちょっと～、万葉！なんで昨日電話でなかったのよぉ～」

「あ、ゴメン友里恵。うわっ１０件もある・・・」

二人はこっそり話している。

「そうだよ！たっっっくさん掛けたのに出ないんだもん。家にはいないしさぁ」

「ゴメンってば、それに昨日ホテルにいたのよ。」

「ホテルぅ～??」

万葉はしまった・・という顔をした。

「だ～れと行ってたのかなぁ??正直に白状せい！」

万葉はしょうがなくおとといの出来事から昨日の出来事を友里恵に伝えた。

「へぇ～。あ、私もいいことあったんだよ?」

いいこと?といえば・・・

「松本先輩とデートでもした？」

「あったりぃ～☆」

ほんっと単純。万葉はあきれたが友里恵は昔からの幼馴染。
そんなのもうなれっこ。逆に万葉はそれが楽しいくらいだ。

キーンッ　チャイムがなり授業が終わった。

「あれっ？万葉ちゃん！」

後ろから肩をポンッとたたかれた。

「ま、松本先輩。」

「おはよう。あ、友里恵ちゃんもおはよう☆」

「おはようございます☆松本先輩！」

友里恵は篤朗の前だと、とっても明るい。
万葉は噴出しそうになるのを堪えて見ていた。

「万葉！」

だれかが私を呼んだ。

「佑、おはよう。あ、そうだったそうだった。はい、これ」

万葉が渡したのは少し小さめの箱。

「誕生日おめでとう。」

「おぉ～！万葉ちゃん佑大の誕生日覚えてるんだぁ～！！」

佑の誕生日はたまたま万葉の友達の誕生日と重なっていたため覚えていたのだ。

佑も、めったに知り合いからもらったことがないのでうれしそうだ。

「ありがと、そういえば篤朗。小野が呼んでたぜ？」

「まぢっ！？行ってきまーす☆南ちゃ～ん」

篤朗が走っていった。友里恵は、とても寂しそうだった。

そのあと、友里恵は一人になりたいからといってしまい万葉は佑に篤朗のことを聞くことにした。

「ねえ。松本先輩ってさ・・・」

「あぁ、篤朗はさ。昔、付き合ってた彼女がいたんだよ。俺らが学校分かれたとき。」

「えっ？」

くわしい話はまだまだありそうだ。

そのくわしい話は、また次回。

詳しい話（前書き）

詳しい話→そのまんまです（笑）

詳しい話

「付き合ってた女の子？」

「そ、すっげー仲良かったんだぜ。
いつでも一緒だったし、でもな・・・」

「えっ？でもって？」

佑は言ってしまおうか迷ったなぜなら。

「お前とすっげー似てるんだよ。」

そう、万葉はそっくり生き写しにしたように『似ている』からだ。

「え・・・」

「俺は最初。篤朗はお前がすきなんだと思っててさ。
俺はそれでも結ばれてくれるんならいいと思った。」

「そうなんだ。でもなんで『付き合った』なの？」

佑は、寂しそうに語った。

「死んじまったんだよ。崖から飛び降りて、自殺だった。」

「そんな・・・」

万葉は取り返しのないことをしてしまったと思った。
友人のことでこんなにつらく、悲しんでいる佑を始めてみたからだ。

「俺はその後、いつもどおりだった。そこまで関係がなかったからな。
だけど、篤朗は・・・」

周りにはだれもいない。皆講義に出ている時間だ。
佑と万葉は講義がないため、まっているいつも寂しい時間だ。

「数日間、部屋にこもった。夜通し泣いてたみたいだ。
そのあと学校に来てもいつもボーッとしててな。かわいそうだった。」

「そうなんだ。でも、今はあんなに・・・」

「お前がいるからだよ、お前は似てるからな。そっくりだし、
雰囲気も似てる。それに後から聞いたけど、篤朗は小学生時代
お前のことは知らなかったらしい。だから・・・」

「私をその女の子と重ね合わせているってこと。」

「そうだ。」

万葉は悲しみに悩んだ。

そりゃあ、自分はそっくりな彼女に似ている。
でも、自分の心は篤朗(かれ)にない。佑にある。

自分にできることは何もない。

だからといって何もしないのも・・・それに友里恵にも
それは失礼だと思う。

「その女の子の名前ってどんな?」

「安斎（あんざい）　美麗（みれい）。安斎財閥の令嬢だった。」

「美麗・・・そっか、松本先輩の彼女って美麗だったんだ。」

美麗

「お前、安斎のことしってんのかよ。」

そして、万葉は口にした。衝撃の事実を。

「やってウチラ。姉妹だもん。美麗が私のお姉ちゃん。
でも、父親が違うの。お互い母親似みたいだから。」

「そうだったんだ。だからか・・・」

でも、姉妹だからといってそこまで会えるとはいえない。
っと万葉はいった。

「たまーにあってたんだ。仲のいい友達みたいなもんだったんだけど・・・
中学あがってから会ってなかったから。」

佑もうなずいた。

「でも、美麗って双子のはずだよ?美麗が双子の妹。
双子の姉の名前、たしか沙希代(さきよ)だったと思うけど・・・
たしかそっちもそっくりだよ?」

「あ、渕上君。」

「み、嶺崎。どうして・・・」

いきなり現れた。

佑も万葉もあぜんとしている。

「会いたい人がいるの。」

美麗（後書き）

会いたい人って！？

もうそろそろこのお話も終わりそうです。

もしかしたらシリーズにするかもしれませんが・・・。

それまで、よろしくお願いします！

会いたい人

「会いたい人・・・・？」

「松本　篤朗っている？」

二人は動揺した。

「なんで香帆莉先輩。松本先輩のこと、知ってるんですか―？」

「嶺崎、篤朗とお前はなんの接点も「あるのよ。」

「「えっ？」」

二人は、何がなんだかわからなかった。

松本先輩を、香帆莉先輩が探してる？

「俺、呼んでくるから。万葉、嶺崎と一緒にいろ。」

「う、うん」

佑が篤朗を探しにいった。

そして、佑も万葉も。

この後に起こる、ありえない真実を

知ることとなる。

会いたい人（後書き）

なんかミステリアスになってますね・・・

まぁ、話を作るのって難しいですが・・・

残り、あと少し！がんばります☆

それまでどうか、お付き合い願います☆

ありえない事実

「っなんだよ～。はいはい、歩きますってだから手を離せよ～。」

「うっせー！話を聞け。あそこにいる女子がお前をお待ちだ。」

「誰だろ？」「さぁな。」

ほっぽり出された篤朗。

目の前には知らない女性。

「あの・・・「忘れたとは言わせないわ。」

香帆莉の表情が険しくなり、篤朗をにらみつける。

「えっと・・・「あら、顔を変えただけでわからなくの？ほんっと失礼な人ね。」

香帆莉は冷酷そのものに篤朗を睨み付ける。

「沙希代よ。あなたの最愛の彼女。」

「「えぇぇっ！！」」

「ま、松本先輩の彼女って美麗じゃ・・・「ないわ。」

「嘘だ。篤朗は確かに・・・」

「そうね。でも、それは真っ赤な嘘。本当の彼女はこの私。」

皆は不適な笑みに見えたかもしれない。

でも、万葉はその中で一人。

香帆莉の思いに気づくことができたのかもしれない。

香帆莉の笑みを寂しい笑みと感じたから。

本当の事実（前書き）

過去編です。

篤朗、そして美麗と沙希代。（これは、高校でのお話）

この3人の出会いです。

本当の事実

「松本篤朗です！特技は野球です。部活は野球部志望、よろしくお願いします！」

私は、一瞬のうちに恋に落ちた。

否、私たちかもしれない。

松本篤朗。

彼は私たち双子を魅了した。野球部のエース、そして成績優秀。

私たちはどんどん彼に溺れていった。

『あっちゃん。』『んっ、なんだ？』　『来て。』　『おう。』

『あっちゃん。私、あっちゃんがスキ。』

彼はしばらく何も言わなかった。

『両思いとか、まぢか・・・』

このとき、私は篤朗と結ばれると思ってた。

でも、それは大きな間違いだった。

「ねぇねぇ！篤朗。今日、暇？遊ぼうよ」

「無理～。俺には先約あんの。」

「えぇー。誰？」　「沙希代だよ。」

「えぇー！じゃあ連れてってよぉ～・・・てかいつの間に沙希代のこと呼び捨てぇ～？」

双子といえども、美麗のほうが少し可愛くて。

そのとき、私たちは学校のマドンナ双子組って言われてた。

でも、ぜんぜんうれしくなかった。

美麗は美人。だからすぐに彼の心は揺れるだろう。

私は、お母さんに言って私だけを転校させてもらった。

条件はあったけど。

でも、あたしには切り札があったから。

あたしは小説家だった。売れてた。だからそれで暮らしていけた。

篤朗と離れるのは寂しかった。でも、彼とはもう一緒には居ることができない。

私は、芸名。作家名といったほうがいいかな？

嶺崎香帆莉として、生きていくことにした。

家族との、絆を断ち切って。

篤朗が美麗の死を悲しんだ

「でも、じゃあなんで篤朗と美麗が付き合ってるってなってんだよ。」

「それ、美麗が…悪いんだと思う。」

「へっ？」

佑は驚いた。

もともと美麗のことを知っているのもおかしいと思った。

それに、美麗が悪いって・・・

「香帆莉先輩は私たちのシェアハウスに5日遅れて入ってきた。

そのとき最初、ね？思ったの、この人、美麗に似てるって。」

「でも・・「ううん、言わなかったのは。ううん言えなかったのは、

」

「美麗から、いろいろ言われたの。」

佑は、ここにまたもうひとつ。

大きな謎が隠されているような気がした。

美麗と万葉（前書き）

美麗と万葉の出会いです。

万葉語りです。

美麗と万葉

「ねぇねぇ奈央(なお)ぉ～。今日、新しい人入ってくるんでしょ？」

「そうだけど、なんで。」「2年でしょ～？どんな人かなぁっと思って。」

「あ、あの子だよ！たしか・・・安斎美麗。お嬢様タイプでウチラの・・・」

「「苦手体質ナンバー1・・・」」

ここは体育館。

私はバトミントン部の部員で、この奈央って人は私の幼馴染で木梨(きなし)奈央(なお)。

ひとつ年が違うけど、結構仲良し。

「はい集合ーー！！」

先生に呼び出された。奈央が世話係にならないといいな・・・

奈央とウチはダブルスのペアだし、奈央が世話役だったらあたしまで・・・いやだぁぁぁぁ（涙）

「新しい子が入りました。安斎さん、ごあいさつどうぞ。」

「安斎美麗で～す♪つおく（つよく）なれるようにがんばりまーすぅ☆
仲おく（なかよく）してくださいねぇ～♪」

来たよ、ぶりっ子・・・

寒気がする。昔から、私と奈央はぶりっ子とかナルシストとか、嫌い。

「じゃあ世話役は・・・」

ううっ・・・当たらないで！

「木梨さん！ペアの吉福さんもよろしくね。」

あ、あたっちゃった・・・（涙）

「「は・・・い・・・」」

「キャーッボーイッシュだぁ☆よろしくぅ♪」

「「・・・」」

こっからウチラは無視をしまくったんだ。

う、うざい・・・うざすぎる・・・（前書き）

あ、いつの話か書くの忘れてましたね。

前の３７話から中学編です。

う、うざい・・・うざすぎる・・・

「おはよー☆」「「おはよう、万葉。」」

「お、おはよう。吉福さん。」「おはよう、秋崎くん。」

私はクラスですっごく明るいほう。

しかもそのおかげで友達もたくさんいる。

「あぁーーーっ☆はーちゃんいたぁ♪来て来てぇ～♪」

クラス中がはぁぁっ??とざわめく。

しかも、私を指して・・・

「ねぇねぇ。はーちゃ「ねぇやめなよ。」

ウチの幼馴染の男子。仮谷俊平(かりやしゅんぺい)が言ってくれた。

「なにがぁ?別にいいでしょ?ねっ?はーち「ゴメンけど、あんたにそれ言われんの。ヤダ」

「えっ・・・?」

「ゴメンけど。それ、言っていいの私が許した人だけだから。

言われてイヤだと思った人には言わないように私は言ってる。だから、あんたは言わないで。」

「ちょ、ちょっと〜〜。なぁに言ってるのよぉ、ともだちで「違う。」

私はとうとう、堪忍袋の尾が切れた。

「言っとくけど。『友達だから許す』とはいってないでしょ？
許した人だけよ。あんたに言われたくないって言ってるの。ただでさえ皆『かずは』って
言ってくれてるのに。空気が乱れるの、それと・・・」

「奈央と私、そしてこの学校の生徒先生全員に、迷惑を掛けないで。」

ぶりっ子先輩。バイバ～イ

それから、数日後。

あの、ぶりっ子先輩（安斎美麗のこと。沙希代先輩は尊敬できる先輩ナンバーワン。）は
転校していった。

しかも、ぶりっ子先輩は何も言わないで沙希代先輩が謝りに来てくれた。

皆、沙希代先輩のことはスキだったから、行ってほしくないって泣いてる子もいた。

でも、転校しちゃった。

さようなら。

沙希代先輩。また、会えるといいな。

さようなら。

ぶりっ子先輩。もう、二度と私の目の前にそのキモい姿をさらさないでください。
あ、あと、そうじゃなくても、声も聞きたくないわ。

それから2ヵ月後。

私たちは、この中学を卒業した。

同情、そして別れ

「その後は何も知らない。でも、なんで自殺したの？」

沈黙があたりを支配した。

「ストーカーに追い詰められて、死んだのよ。」

「へぇ？そんなやつにストーカーがつくのか。」

佑はもう、美麗のことを相当嫌っているのか超怒ってる。

そこで、篤朗の口が開いた。

「あいつは俺が高１の時、突き放したんだ。そのあと、何人かと付き合ってそのうちの
一人と大喧嘩してな。それでストーカーされて自殺した。」

「俺が悲しんだのは美麗が死んだからじゃない。
こんなことで死ぬやつなら、沙希代と一緒に転校すればよかったと。
同情し始めてたんだ。だけど、自殺を知って同情は空に消えて行ったよ。」

寂しそうな篤朗の言葉に、万葉は胸が締め付けられた。

「私は、あなたに謝りに来たの。あの時、あなたのそばにいたらよかったのにね。
ゴメンなさい。」

「俺はいい。だけど、今の俺の心は沙希代。お前にないんだよ。」

「わかってる。友里恵ちゃんでしょう？私は大丈夫。しっかりしてね。

じゃあ私は行くわ。万葉ちゃん、私はこれから一人暮らしが待ってるから。

これ、渡しとくわね。」

カサッ

鍵だ。

一緒にすごしてきた。思い出の鍵。

「いいえ。」

ぎゅっ

私は香帆莉先輩の手に鍵を強く、渡した。

「持っててください。いつでも帰ってこれるように、待ってますから。」

「ありがとう。万葉ちゃん。」

香帆莉先輩は涙ぐみながら去っていった。

これで、すべてが終わった。

そして、友里恵の恋にもそろそろ終止符が打たれそうだ。

同情、そして別れ（後書き）

一気に3話も・・・

久しぶりにすごいこととしました。

あと一息かなっ？

がんばって書こうと思います。これからもよろしくです＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8344y/

Mixed juice　～カラフルな恋の物語～

2012年1月10日15時46分発行